



元日



春を暮るの始わ月れぬ先るむこと一ヶ月より下り人よ
ゆきまとえ眞のまゝあらうすりさんもとすより乃
黒紙すととすく序のも詔奏とげらりテ下とた
わゆしよりひつこちをまなびりとゆつたりとねゆとも乞
よりけり角をとみどりれ候通書よ源のち詔十月
よ奉とて一そく後七年りよ長樂文を作り群長よ
え日暮のれ式を行ひるをす（一ものうすり
杜氏通典云漢高祖十月定秦遂爲歲首
七年長樂宮成制群臣朝賀儀武帝改用
夏正建寅之朔則元日之慶始自高祖

齒固りといふ事をもあつて、膠固の義であつて、脣
よ懸子鶴とその毛の觸を食ひすりぬかれてやが
ら樂すと食ひもひきぬすり又え自と二飼とも
ります

荆楚歲時記元日食膠牙餳取膠固之義
五雜俎云正月一日謂之三朝師古漢書
注云歲之朝月之朝日之朝故謂之三朝
朝之義猶且也

人の門をよねとづねる由を取て此は秦漢の風
高貴帝の二年正月日之朝故謂之三朝
こと利是也あくまでも安樂家よりして名をあらわく
ぞうゆう

錦縫万花谷云董勑答問歲首祝折松枝
男七女二从爲藥飲

房藜

歲除リツより 遺リ藥リ一帖チ今ヌメ農盛リ浸ミ井ヰ中シ至スニ元リ日ヌメ
取ラ水ヲ置ラ酒樽ヲ名ノ屠蘦ト酒ト合タ一家飲ムハテ之ヲ不スニ病ス瘟ニ
疫ヲ或ハ問フ董トド賜タマ屠蘦ト必リ自リ幼ハ先フ飲ム何ヤ也ハ日ノ少ハ者ハ
得タマ歲ヲ故ニ先タマ老ハ者ハ失ス歲ヲ故ニ後ニス

月ちよよと春の葉を食ふと食ふ年日が暮らす
ありても人間の事ありてさうやつてのゆき今のが
あらむせせの葉をさうてわづくよと食
ひゆる

荆楚歲時記云正月七日俗以七種菜作テ肴ヲ

ト
義食之人無刀病

人月

人
元日を鶴日三百と猪日三日と羊日寅日と蛇日巳年
日と馬日午と人日戌日と穀日未とつゝあり十九
上吉よりひ居りてひ立と东方朝りと書もり也
又猿悅ありとすよしの音の代常か事はせんとつとさう
とあらわもとと座のまづ鳴りうる日の時よ七日最丑辰
と坐まづきゆゑに正月の事もすり也よけ日と
て是辰をやうて秋月うら波せ火人の廿日と秋月
やうもれうひまくまく

五牛六馬七人八穀此出東方朔占書然亦俗說晉以前不甚言也

子曰謹

りあらまくは日暮のやうに思ひて居
ゆの静ひをほんぢぬとゆかめわざなき
わざとくらへ時よしむ日すとれどもさう
すううふとくらひのまことにあくまくのひ

錦繡一方花谷云正月七日登岳遠望四方得
靜陰陽氣除煩惱之術也

十宿小旦粥

莫あれ時季もとひうゑへありきもあらまう。我じみ
たひつわよの月十日もふらうとすとて物とする。
是よよりてけ日小豆の粥を食して病やれにとど
てて大病よともすつてを粥とから時あよ向へ東
洋へひきぬほきて是と食する年ゆれ御身
うり年とぬうまと夜えのるもすとゆり今れん
あは日よありて小豆の粥と食するもかまぬあり
世風記云正月十五日煮小豆粥爲天狗
祭庭中案上則其粥凝時向東方再拜長
跪眼之終年無疫氣

十日

正月十日今世俗の人奇觀よゆてすりりて
彼自そのまわげわとゆき事よりぬふ
彼尊のまび日とくち銭よ共のゆべて病と至
らしひとづりや文あひて本のゆもけまくさん
五雜俎云齊魯人多以正月十六日遊寺
觀謂之走一百病ト

三月二日

は言所の間のまよりとけ。海まう萬王爐札と
まよひけのまよりとけをめだ然へ事へひとと
阿のふはきありて海水の海藻のよしけあひ一時
あらんまの錦と作つて海まよもりとれ王爐と

うもて海ありやとせ縁わづりのすらきの葉のま
あを崩ゆきてたゞ宣酒作よつて平五より
はあすり開けよとあらばもくちつて二月三日よ
るありん食をよとあらばもくちつて二月三日よ
るの餅を作つて經果てもとすりとくとある
桃花とひのじゆへせ自湯よ桃老をひのじゆと
のあそ百萬人降ふかとくとくとくとくとくと
よとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
よとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
錦繡万花谷云周南王謠乱群臣悲愁千
時設河上曲水宴或人作草餅貢南王王
寧其味為夷也王云此餅珍物也可獻宗

廟周世大治遂致太平後人相傳作草餅
三月三日進于祖吳草餅興從此始
本草云三月三日酒浸桃花飲之除百病
益顏色

上已

彼日をよことのう事淨の代にび日との日を日代
用てあれつらようとは身ひきりて魏晉の代
けりやてこの身よりくまでもうととことへりうる
陽氣は月は日よつてうちの候よそのことをさ
はうむり又重家難紀へ日月はとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

今のせひ送と見てこうどもの日のいづれもあり
 五 雜俎ニ云、三月三日為上巳。此皆魏晉以
 後相沿漢猶用已不以三月也
 五 雜俎ニ云、周公謹癸辛雜志謂上巳當作
 上巳謂古入用月例以十午恐上旬無已
 目不知西京雜記正月以上辰三月以上
 已其文甚分明非誤也但已字原訓作止
 謂陽氣之止此也則已恐即是已字但不
 可以支為子耳

開水窯

け日あらのほもてゆき窯がうへ窯を作り窯と

けり事や物をてき雄裏てらとのあらうられと
 あとみうちをすそに作るはまくあらうものやうれ
 すまうてきくそに作るはまくとくあらうをつりと
 うのきとさりて飲むする取觸とあすれといひと
 てまくとまくあらうとくあらうとまくもびと
 とくもの又のほすき屋の章章れは時平素篠
 篠とつるりの月のゆよかうへばともうりとく
 の日三月とくべからり一村のものいはれいわ
 つまくあらうゆき石屏のぬとけいのぬあよ
 りとくあらうゆと飲もうゆあらうぬのむけ
 けりとあらうり

韓詩外傳云三月桃花之時鄭國之俗三月上巳於溱洧兩水之上執蘭招魂祓除不祥也

荊楚歲時記云荊楚四民三月為流盃曲水之飲取黍麴菜汁和蜜為末厭時氣續齊諧記云晉武帝問尚書郎摯虞曰三月曲水其義何指答曰後漢章帝時平原徐肇以月初生三女三日俱死一村以為粧乃相携水邊濯洗因流水以瀝觴曲水起是帝曰若此所說便非佳事東哲曰摯虞不足以知臣請說其始昔成王卜洛邑

因流水以泛酒故詩羽觴隨波又秦昭王置酒河曲有金人自泉而出捧水心劖日令君制有西隻因立為曲水二漢相沿皆有盛集

後漢書註劉昭曰一下說云後漢有郭虞者三月上巳產二女二日中並不育俗以為太忌至此月日諱止家皆於東流水上為祈禳自繫縕謂之禊祠引流行觴遂成曲水

五月五日之日陽氣甚盛水氣亦然

端午

五月五日端午子午年乃孚也多事
子午之日用以逐之辟邪也端午之日夏至之日初
子午之日也子午之日辟邪也端午之日仲夏之日初
亦云五月五日也八月十五日也中秋之日也秋之日
亦云五月五日也八月十五日也中秋之日也秋之日
九月九日也重阳之日也秋之日也秋之日
亦云九月九日也重阳之日也秋之日也秋之日
亦云九月九日也重阳之日也秋之日也秋之日
亦云九月九日也重阳之日也秋之日也秋之日
亦云九月九日也重阳之日也秋之日也秋之日
亦云九月九日也重阳之日也秋之日也秋之日

之日端午子午年乃孚也多事

容齊隨筆云唐玄宗以八月五日為千秋
節張九齡上大衍曆序云謹以開元十六
年八月端午獻之又宋璟表云月惟仲秋

日在端午然則凡月之五日皆可稱端午

行の有焉

古者五月葦葉而作之以避之也今人
作艾而佩之以避之也古者以五色絲繫
臂而作之以避之也今人以五色絲繫臂
而作之以避之也

行の有焉

五雜俎云古人歲時之更行於今者獨端午
午為多龍渡也作粽也繫五色絲也飲菖
蒲也懸艾也作艾虎也佩符也浴蘭也鬪
草也采茱萸也而又以雄黃入酒飲之并噴

屋壁牀帳畢鬼塗其耳鼻云以辟蛇蟲諸
毒蘭湯不可得則以午時取五色草拂而
浴之至於競渡楚蜀為甚吾閩亦喜為之
云以駁疫有司禁之不能也

葛藟

ひくらの南を過ぐる事あらずの事と
ゆふとび日のわざへはよとのせよへる所とて
まほへありえりて楚蜀の間とて山脚より北上
船競渡のせひとて舟車ありゆめとて
うとうてあるとて北上ゆきりすれど事ゆの極病
とて

棕

也のよき風土記云、蒻葉を以て糸で繋て、
陰陽おつじのねよやくをまつてすとこ又を家を守る
の阿鷦牛の事よりあくまれが、そ間すと作りそ
と角黍を以て籠を守るのくらと作つてあくま
さうの是を食ふ節、ひさしぬねやうじさうり
風土記云、以蒻葉裹稻米為粽、以象陰陽
相包裹未分數也。

天宝遺夏云、宮中毎到端午節造團角黍、
貯於金盤中、以小弓造弓子纖妙可愛、架
箭射盤中粉團中者得食、蓋粉團滑膩而
難射也、都中盛於此戲。

風俗通云、五月五日以五絲繩繫臂辟兵
及鬼、驗人不病、驅疫一名長命縷、一名辟
兵符、一名五色縷、一名練索。
万花谷云、端午日以艾為人置户上辟惡
也。

やの素候を食ふるひ、もと辛氏の名子七月七日
うちねを以て敷布とすりて、すりて外、瘧疾
のあらわしをぬるをさせの時、素候をのりのゆ
くもとく身奥とあつてかねほの人、肩よ素候よ
食ふる年中瘧疾無く。

十節記云、昔高辛氏少子以七月七日去

其冥無足成鬼神於人致瘧病其冥常食
素餅故當其死日以素餅祭其冥後人是
日食素餅其年中無瘧病

七夕

よりの年年牛嶽せうらの星の河をもぐれり鳥鶴天の
よみらあて橋をわたりて御とりすすむ全集はと
みたる事倍によひくまのれをよそあはむよめを
ひうあつひのけびねりとうらしきくよりゆく
してかのじむとよまわらひのくの河ぬの年年
支よ柳をもみのく嶽せ牛嶽はとひと清波月
とむすづくと河を

さうきり一年よ今とのひくせことおや河を
ゆうえ鷺華の情やよ邊せ浦との月もりよくにし
年く月よはるありすれうるをよますひうる
ぬよもひくのひのひをねわく難をひくひ
にのひて流きゆくらむよつりこゑとくひ
鐵塔の又一丈のゆのと流の下よりよキとひを
つこのませてともとあやしくてもひづまを
らうやんともひづれよキとひよめとまくらく
らゆつて蜀の國よひごと嚴平をよどとくほる
のよひごと嚴平をよだてねじ嚴平をよどく
とく年月をあらわす年の年月をあらわすとくよき

五のよしに可るるよまととづくものに術あるをす
ト、彼くらむちぢりも小僧さんひのゆす内
くちくうへ、かうとこしのまよ六僧ゆきくも草年
ゆゑどもぞとてよきとて僧す草年のとく
あうりせのア内うちありよと五難翅又山陽靈
鶴う體湖夜漫記をもとめかのり毎夜見内より
きてりあむゝうり博物志象様の漫游よりてほよ
千載の下婦人よみづくのまうとやうとよ度
彌のとぬと是を清潔のとよとてはやび活厚
のあをうとああああああああああああああ
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

齊諧記云夫河東有織女乃天帝之子機
梭勞役容不暇理天帝憐其獨居將嫁與
河西牽牛之夫脅嫁後竟產女工天帝怒

責令歸河東惟一年一會

淮南子云烏鵲填河成橋渡織女

博物志云有人居海上者見年々八月有
浮槎去來不失期多齊輶乘槎而去至一
處遙見宮中有織婦見一丈夫牽牛渚次
飲之此人問是何處答曰君還至蜀問嚴
平君至蜀問平君答曰其年月日容星犯
牽牛正是其入列天河時也

五雜姐云牛女之會始於齊諧成武下之妄言成於博物志乘槎之浪說千載之下婦人女子傳為口實女人墨士乃習為常語使天下列宿橫披汚穢不亦可恠之甚耶

乞巧真

鑑湖夜談記云下土無知愚民好誕妄傳秋夕之期指作牽牛之配致齋請繫之操受此汚辱名上

七夕乞乞巧のすゝのとひすまひ文類初よこよみをせらる夙菜湯名を潤て應くよ西草のじにみとのゑしきく一ひとひふ二年の日よめを竹とゆり角のき家の時々やん端どもの夙菜やとひすまひの二年齋つま嬪也あくけふもとのゑがおう月むくもとをとすとゆつものひをひうとそゆるてゆようととをともと乃真ともりすう又きふをああ揚毛也とちむもとのゑがおうとゆるの日内え本のとくとく夙菜湯饅をとくとく庵やれつてゆきとせ幸とえふと二年よりゑひつてゆく物候とせらてりう家のゆれとくゆつてりうとくゆくとて物候のゑねよりのとひとくみとくわ天宝遺吏云官中以錦結成樓殿高百尺

上可_レ以_テ勝數十人陳以_ニ凡_一果酒矣設坐具以祀牛女二星嬪妃各執九孔針五色線向月穿之透者為_ス得巧之候動_ニ請商之曲宴樂達且土民之家皆効之

錦織万花谷云郭翰少有清標乘月入庭中視空中有_リ人冉々而下乃一少女明艷絕代曰吾天之織女也上帝賜命遊人间願乞神契乃外堂供枕欲晚辭去後夜復未翰戲之日率牛郎何在那敢獨行對曰陰陽變化兩渠何_レ至七夕忽不_ス未數夜方至翰問云相見樂平矣曰天上那比人

間問日卿來何遲日人中五月彼一夕爾忽一夜悽惻流淚日帝命有期便當永訣以七宝枕留贈而去

十五日

ノモ_レを盡業_ニ盡_ニの因連の母佛鬼のやひ生_ニ食_ニ以_テひり時佛_ニ盡業_ニ作_ニの七月十_ニ不_スり百味_ニ草_ニと_スア_ニ爲_ニ八十日_ニ修業_ニて後母佛鬼造_ニわんじく_ニ食_ニひり月連佛よりてつと_ニと_スと_ス子_ニ草_ニすらみの_ニ盡業_ニの_ニ作_ニと_スと_ス先_ニと_ス不_スて_ス世_ニ盡業_ニ盡_ニ梵禮_ニ作_ニと_スと_ス例懸船_ニと翻譯_ニ倒懸_ニと_スと_ス事_ニち

まことに鬼のうへひさりとあはれづかひておはなは
鬼のまもくをまのすり今めの人に画るよし
ば日と車とひあらひせぬれは處の被禪と
ほんとれりんとひよみゆきて其とまわる者を
被のふとと御鬼とひよみゆきわらは
と不いの人の鳥等もありまじめにうれ
鳥のゆつむかはるはれをもつてゆくと
も民生のたれよがまのとまもつてよちれ
の被禪をまくとまく春は生のけわすまへおれ
むかすその代はれのゆきよせりてえまく
むかむか下をまのまつまうりゆくとまく

えまゆよ嘆きとくとれとまうハ卿のうへおの
ものうひ又び月一回壇のまつとて墳墓と掃除と
と頃かとて山墓をまくとれとあり二種あつまり山墓
かとてあへみかととりて山のよかくうとうとじ
打ととの打とめうとれともまくとれの風流
とれもあり山墓華麗よじとくとくの民俗行と
と脚とこう作り打窓のまつとすびとて画
あとひとく底をく残のうしとすびとても
繪ともとれの衣服と麻のれあめくつらを
うもとまるとつひとくと山墓華麗よじとくと
の是とすりまくと画るよのまくのむかぢよ

連うち無事のまゝのことをひく閑中と云ふ。よ
りの考證とりまうけありてこそ禮其事あるもの
冠服を以て清潔の念をとつて称す。而して之を
てしらずく揖讓して是が事をみらむき家に入く
まうきて又あつてからて見せざとらむる者爲の
禮とづとどもとぞうううううううううううう
んりじねそひをまきを五年み年を行ひて
翁令を以ひて有り

五雜俎云閩人最重中元節家々設楮陌
冥衣具列先人號位祭而燎之又清晨陳

設甚嚴子孫具冠服出門望空揖讓罄折
道子神以入祭畢復送之出錐云孝思之誠
然亦近於戲矣

夢華錄云東京中元賣冥器綠衣以竹竹
三脚如燈窩狀亦謂之盂蘭盆掛冥錢衣

服在上焚之

廣義云徽郡中元日薦新炊丸凡菓以祀
先祖集族衆宴聚而散夜置具度亡放水
燈

文公家禮云節祠如重午中元重陽之類
俗節則薦以時食几鄉俗所尚者

事物紀原今世七月十五營僧尼供謂之
盂蘭齊本月連夏後代廣為華飾乃至割
木削竹趣巧也全人第以竹為圓架加
其首以荷葉中貯雜饌果食陳目連救母
畫像祭祀之失之遠矣

八朔の節

け日の音を又やれりと又されりもあす月端
うち附るて國史典故の誰も祐を以て國の事とて
くわらめ多きよとく人のりふたけりうりと
やまよとあんひつててのれりよりあ年幼もす
ゆうす今のせのくすとあるもの頃とくとけり

十九日

この日を祭るひしのるるもりと
しとまとひまするのうのまみりびとすのま
月の夜半祀とを慶也と改と月をとめい新婦
と夫射と女射共に西向とてのまと月
祭て文の寫やまとととととととととととととと
もとととと文の写やまととととととととととととと

主陽

九月九日を重陽といふ事が古のむら月も九
日もかゝることゆふうすの事とての事の書

房は毎の極景よりひくひく九月九日はちあひま
ヨリしきをあきこて殊^{アモキ}異名^{タガ}の葉落とす背^{シテ}
けもとすのうち葉更のぬとゆくびりのくわ
ケルヒの極景^{シテ}青をあつて下のゆめとあると
よのけり青^{マツカツ}あじよしむる能^{ハサウエ}木^{ハサウエ}暴^{ハサウエ}
ともあり^スと極^{シテ}移^{シテ}又^ハ日^ハ萬^ハ老^ハとゆく入
く^ス候^スとてもあくまじりとす事^ハあらゆることの
せまく^ハまゆきとてあひゆく^ハ候^ス

齊諧記^{シナ}汝^ナ南^カ桓^カ景^カ隨^テ費^カ長^カ房^カ遊^テ長^カ房^カ謂^テ景^カ
曰^ク九月九日汝^ナ家^カ當^ハ有^ハ灾^カ急^カ令^ス象^ナ人^カ縫^ス縫^ス
囊^チ盛^ス茱萸^カ繫^ス臂^ス上^カ登^テ高^カ飲^ス茱萸^カ酒^ナ此^ハ禍^カ乃

消景從其言舉家登山夕還見雞犬一時
暴死長房曰代之矣今入九日登高始此
白眉云漢武帝宮人於九月九日皆飲茱
萸菊花酒令人長壽

十三日の月

今秋の月を歓^スての原^カもともと爾^カのうりけ^カ
もとみどり原^カのれ原^カとぞすすみ
おり^スをあるべつまことばみと聞の十二事^カや^ス鄙^カ
若何^カと彼^カナニ希^ス與^スと歓^スのあらうとひらうも
歓^スとひらうも

かの子

十月のまの月と孫のみまくせのひよりてく候事よりあなまを孫の手を産するやすいのまねも婦人まがともくもよむやうりんととひでゆるやうのたれ惟をかすと又十月まの日す。孫と食くらむるをあくわくしめり

しめり

下季集云承能生多子故女人羨之至十

月死目献餅祝也

万花谷云十月亥日食餅除万病

追跡

すやうの身無事あくたまくの瘦鬼とよむかと
けり翁ねども奥底鬼とより一そじあふどう是と虎と守
一そじあらよ虎と守と是と虎と守と守のえ室正
陽の下よ虎と守の小児と守と辛のあくとあくに活
ひねくらべとひねじと守ひねじと守ちよとね鬼の
鬼と守のうりと守のうりと守と守と守と守と守
と守と守のうりと守のうりと守と守と守と守と
と守と守のうりと守のうりと守と守と守と守と
と守と守のうりと守のうりと守と守と守と守と
守と守のうりと守のうりと守と守と守と守と

とは浮きれ候あらうと見るものゝ數の數
すをばのくもひまく。もうて今更食ふうあり

也。

写詩集あらよほ梅鶴」とほとあゆとあゆとよ
頃碑縁と園の玄蕃代後のみ月よりゆと入あひ
毛移の後うちのえりあるあを公あとすゆへ多くあゆの
作作りうた園へのりうるの入あゆのあゆのうと
さきうり入あああわのわのまよく黴匂の匂のまよく
びきしきききくは月のあれ毛移る月のあれ毛
ありとせのくく月のよつゆとつゆとよげゆ中
かくがくのゆうくびきうり又やよくもまよく

今ううえの月よりうり毛移へうほその月よりうり
平月のうるあうり毛の梅鶴すとけりげぬ毛遷ると云
遷るまよみのうるあすとけりげぬ毛遷ると云
るとくうりのうる鶴ウタガとくうねのうる鶴の毛衡と
うりんかりらりうぬにとくうのうるうとけの
毛とあ連とくうじあ連とくうわうりことのくく
ううくあ連とくうじあ連のうとけのうとけのくく
ううくよとくうじあ連のうとけのうとけのくく

ひかうりうり

世俗正五九月と毛事

月令廣義唐書音訓高祖紀正五九月不

行刑引釋氏智論天帝釈以太寶鏡照四大神列每月一移察人善惡正五九月照南贍部列故于此三月省刑修善隨唐以未事佛甚謹著在法律遇此三月則禁刑
斷屠

